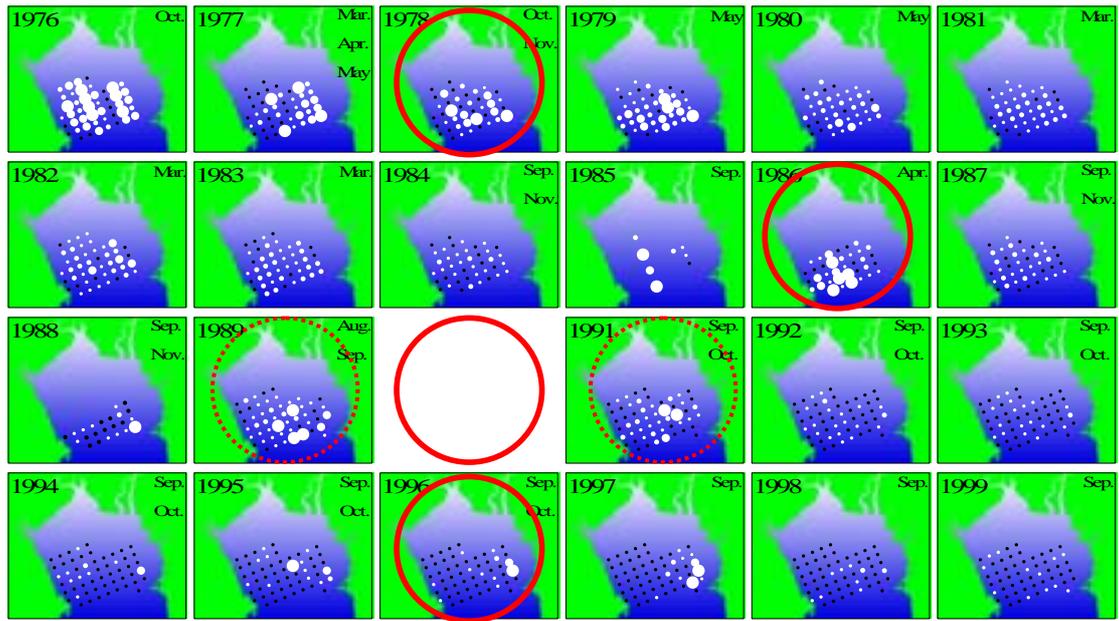


別添資料32：タイラギ成貝の生息量調査結果

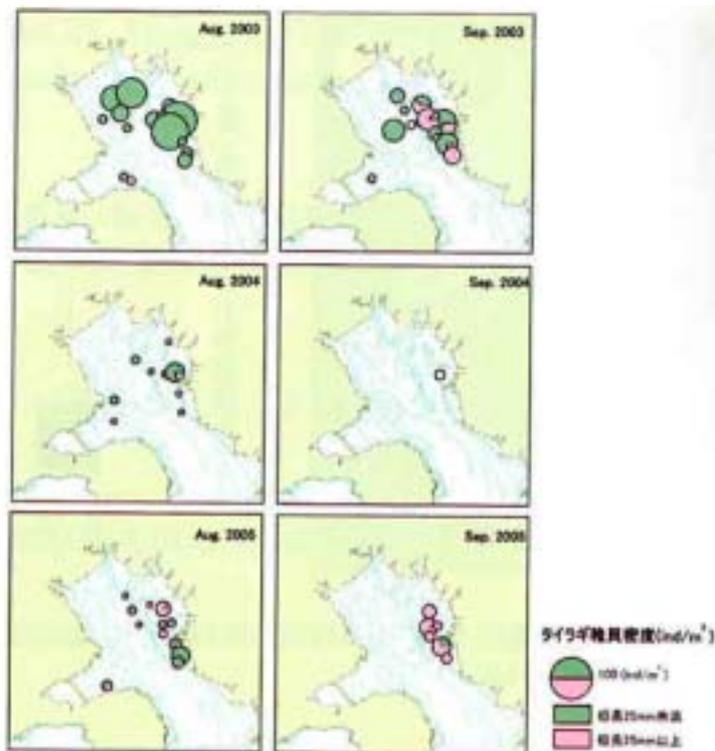


○ 100ind / 100m² ◦ < 100 ◦ < 50 ◦ < 10 • = 0

資料：伊藤史郎(2005)「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会 資料-3 有明海における二枚貝について」

図 35 タイラギの生息量

別添資料33：タイラギ稚貝の密度



注) 上から順に 2003、2004、2005 年、8 月 (左) 9 月 (右)

資料：独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所資料

図 36 タイラギ稚貝密度の分布

別添資料34：基質の違いによるタイラギ浮遊幼生の着底

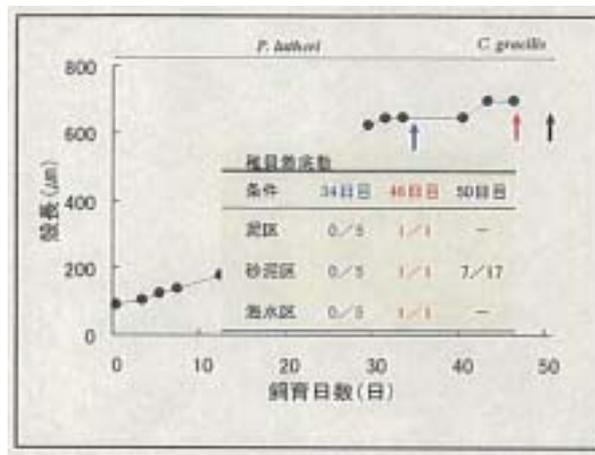
- ・ ガラスシャーレに泥のみを塗った泥区、砂の混じった泥を塗った砂泥区、何も塗らない海水区の3区へのタイラギ幼生の着底状況を観察。
- ・ ふ化後34日目の幼生（各5個体）では泥区・砂泥区・海水区のいずれにも着底せずに斃死（餌はパプロバ・セルリ）。
- ・ 餌を途中からキートセロスに変更したところ、46日目に足を出して泳ぐ3個体を確認し（写真1）試験に用いたところ、泥区・砂泥区・海水区において着底を確認。
- ・ その後、砂泥区の着底稚貝は足糸で砂粒に体を固着して成長するが、泥区の着底稚貝は足糸を出し、泥の上で匍匐を続けて斃死（写真2）。
- ・ 生残が認められた砂泥区に50日目の幼生を入れて再試験した結果、17個体中7個体が稚貝となって成長（図37）。



写真1 46日目（670μm）



写真2 衰弱個体



資料：佐賀県(2004)「第9回有明海・八代海総合調査評価委員会 資料-8 タイラギ浮遊幼生の飼育と着底」

図37 基質の違いによるタイラギ浮遊幼生の着底数の差

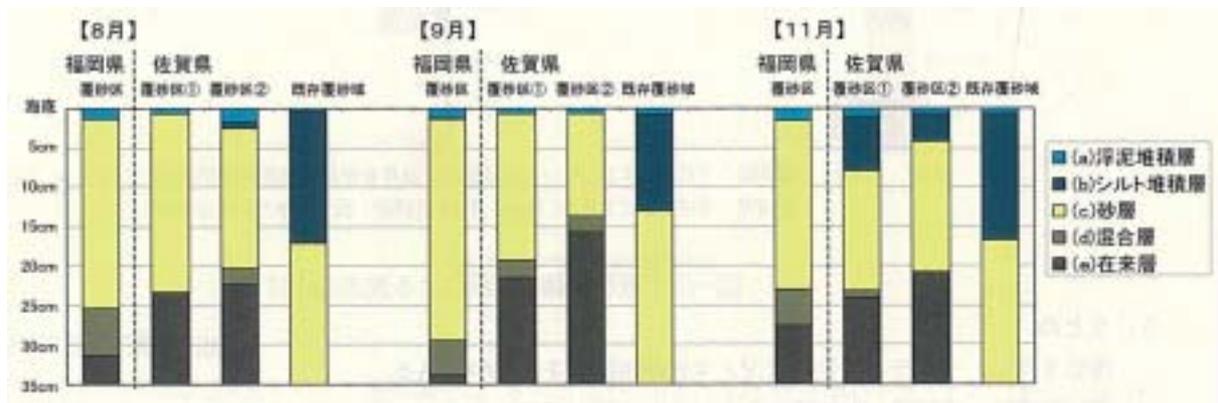
別添資料35：覆砂効果実証試験結果

表 13 タイラギの生息密度

項目	海域 区域	福岡県		佐賀県			
		覆砂区 (砂)	対照区 (覆砂なし)	覆砂区① (砂)	覆砂区② (貝殻混合砂)	対照区① (覆砂なし)	対照区② (既存覆砂域)
調査測点数		12	3	6	6	3	3
タイラギ 個体数 (/0.5 m ²)	8月	1~29 (16)	0	9~46 (24)	21~55 (36)	0	0~1 (<1)
	9月	2~19 (9)	2~4 (3)	0~4 (1)	1~5 (3)	0	0
	11月	2~13 (8)	2 (2)	0	0~1 (<1)	0	0

注) () 内は区域別平均値。

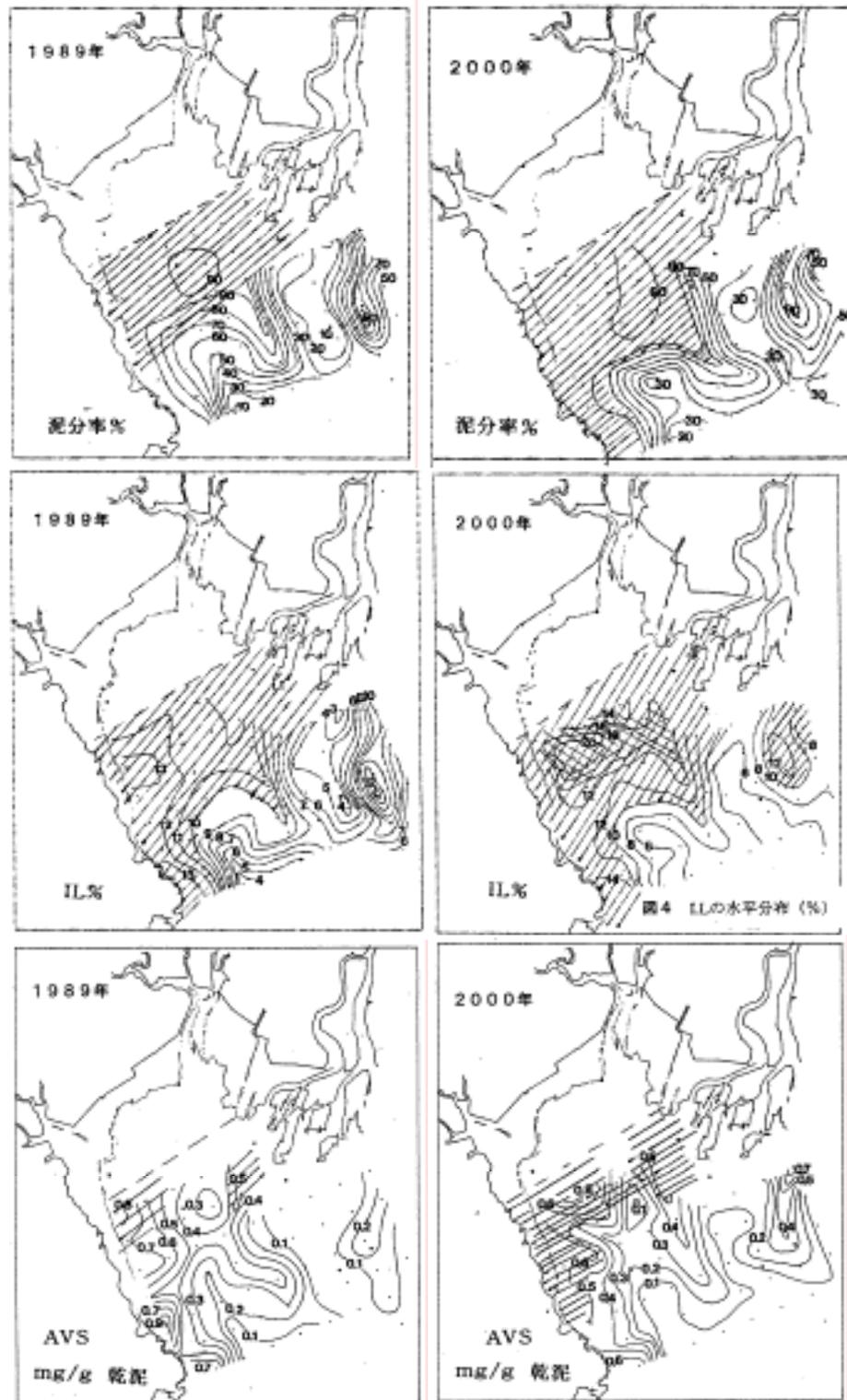
資料：水産庁（2006年）「第20回評価委員会 資料-5 有明海改善のための実証試験について」



資料：水産庁（2006年）「第20回評価委員会 資料-5 有明海改善のための実証試験について」

図 38 覆砂域における底質の層厚 (区域別平均)

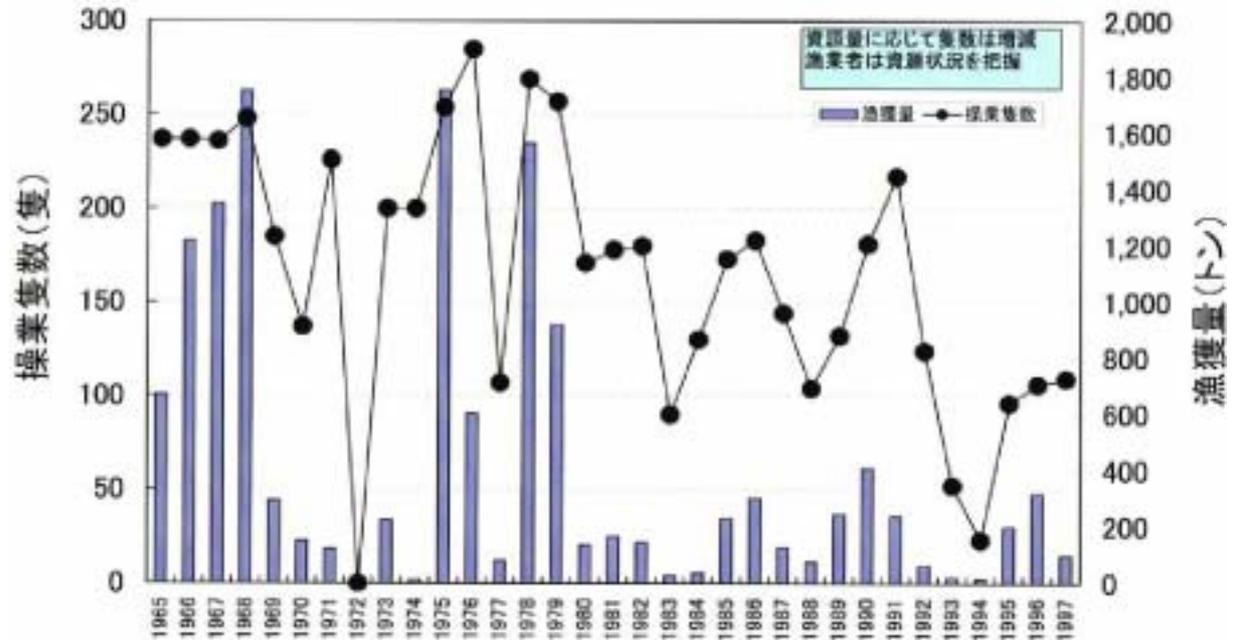
別添資料36：有明海北西部の底質調査結果



資料：1. 古賀秀昭(1991)：有明海北西海域の底質及び底生生物，佐賀県有明水産試験場研究報告，13号，pp.57-79
 2. 大隈斉，江口泰蔵，川原逸朗，伊藤史郎(2001)：有明海湾奥部の底質及びマクロベントス，佐賀県有明水産振興センター研究報告，20号，pp.55-62

図 39 有明海北西部の底質環境調査結果：泥分率，強熱減量(IL)，酸揮発性硫化物(AVS)

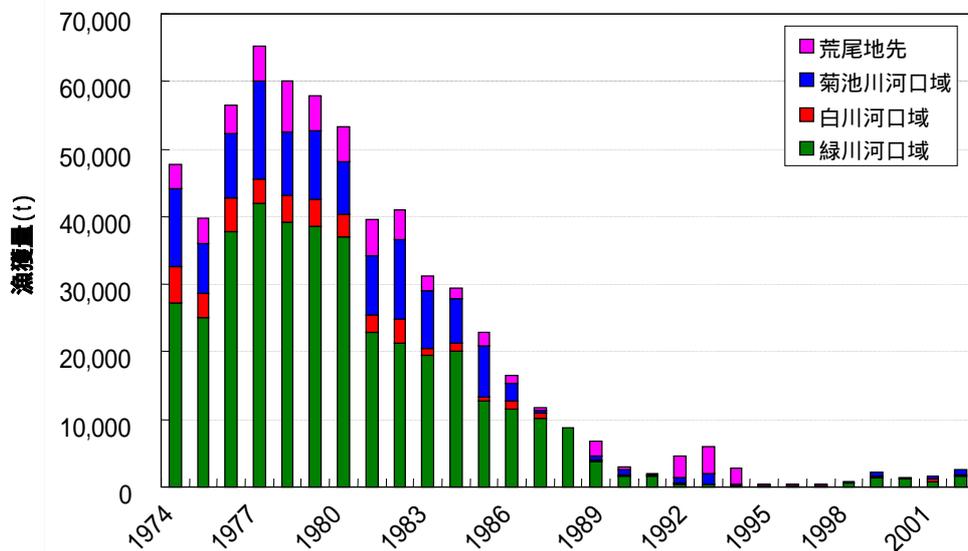
別添資料37：タイラギの漁獲努力量（大浦漁協）



資料：中田英昭 [水産資源グループ] (2006) 「第 23 回有明海・八代海総合調査評価委員会 資料 2-1 水産資源グループによる検討内容」

図 40 大浦漁協におけるタイラギ潜水器漁業隻数と貝柱漁獲量

別添資料38：熊本県のアサリ漁獲量



資料：伊藤史郎(2005) 「第 15 回有明海・八代海総合調査評価委員会 資料-3 有明海における二枚貝について」

図 41 熊本県のアサリ漁獲量の推移

別添資料39：アサリ資源と漁獲との関係について

- ・ 緑川河口域（A 漁協）では、殻幅 13mm 以上のアサリを 4 月から漁獲している。
- ・ 近年の緑川河口域において、春発生群は約 1 年後には殻長 28mm、殻幅 12mm 前後までに成長することから、漁場加入後約 1 年で漁獲可能サイズとなる（図 42）。
- ・ 漁期スタートの 4 月には、前年春生まれ群の成長の早いものから順次漁獲し始め、アサリの多くが漁獲対象サイズとなる 5 月に漁獲がピークとなる。その後、7 月以降漁獲量は急激に減少し、ノリ漁期が始まる 10 月には漁期が終了している（図 42）。
- ・ A 漁協における 2000 年の 1 日あたり漁獲量の推移をもとに初期資源量を推定した結果、資源量の 98% 以上を漁獲していたとの結果が得られた（未発表）。このことは、毎年、前年の春発生群を 1 歳の春から秋までの間にほぼ取り尽くしてその年の漁期を終了していることを示している。
- ・ なお、1970 年代から 1980 年代にかけて、熊本県においてはアサリ稚貝（殻長 21mm、殻幅 9mm）が漁獲され、全国に出荷されていたことから、当時、多くのアサリが再生産に寄与できなかったことが示唆される。

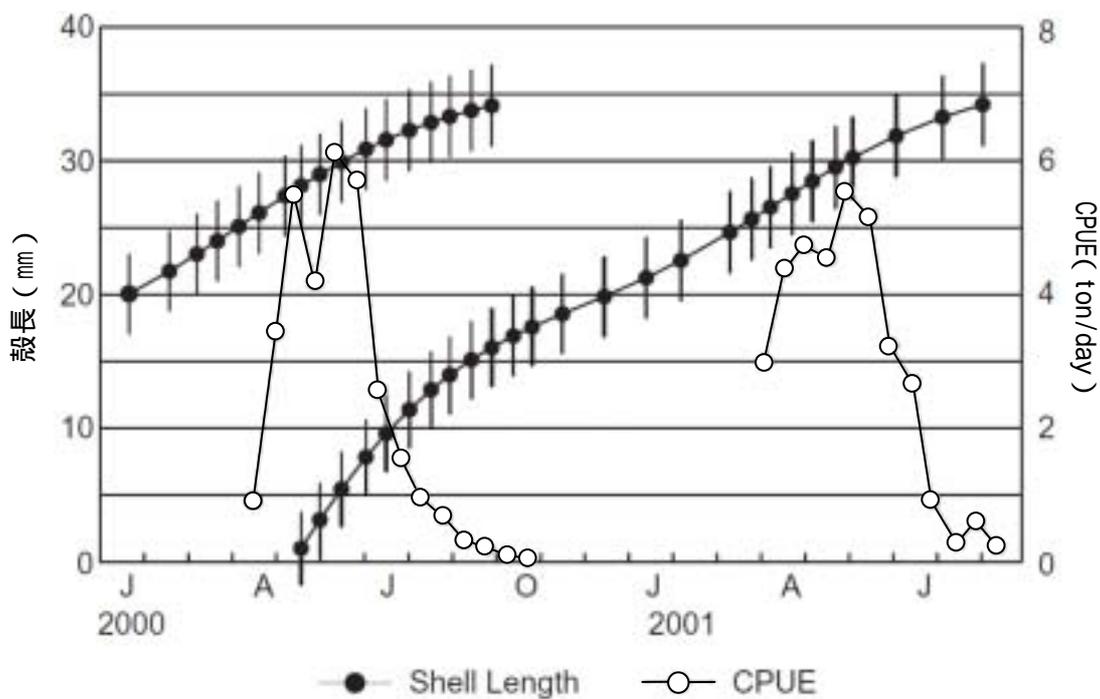


図 42 アサリの殻長と CPUE(1 日当たりの平均漁獲量)の推移

資料：熊本県作成資料